

題目：温故か知新か：

SNS 上のネットワーク構成が新入生の大学生活への適応に与える影響の検討

氏名：大西幸奈

指導教官：結城雅樹

本研究では、新しい環境（大学）への移行期にある新入生にとって、SNS で繋がりコミュニケーションをとる対象が、既存環境の友人か新規環境の友人かによって、大学適応度に差が見られることを検証する。

SNS とは “Social Networking Service” の略であり、対人関係の形成や人と人との繋がりをより円滑に行うツールとして多くの人に利用されている。最近では、オンライン環境はオフライン環境と結びついている (Reich et al., 2012) と言われ、SNS などオンラインにおける対人関係はオフラインにおける対人関係を補完・促進すると考えられている。そのため、学生同士の交流に SNS が利用されることで、大学生の適応度が上がる (Kalpidou et al., 2011) という先行研究をはじめ、SNS の利用と大学生の適応度との間にポジティブな関連が見出されてきた。しかし一方で、新入生状況においてのみ、SNS 上の友人数と大学適応度が負の相関を示す (Kalpidou, 2011) というように新入生状況の特異性が指摘されてきた。また、大学入学後に入学前から親交のある友人との関係を懐かしむ “friendsick” により、大学において不適応を起こす (Paul & Brier, 2001) とも言われ、新しい環境で適応していくためには、同じ環境にいる友人との関係形成が重要であると言える。特に、旧来の友人と会う機会が少ない遠隔地出身の新入生にとってはなおさらである。

以上より、SNS を、新規関係の構築よりも既存関係の維持のために利用する新入生ほど大学適応度は低く、その関連の強さは入学時の引越し経験者においてより強いだろう、という理論仮説を立てた。

上記の仮説を検証するため、大学の学部一年生を対象に質問紙調査を行った。質問紙は SNS の利用実態を尋ねる項目と大学適応度などの尺度から構成された。その結果、SNS を、大学入学以降の友人とのやりとりに利用している新入生ほど、大学適応度が高く、大学内の友人数が多いという仮説に一貫する結果が得られた。また事後的な分析の結果、SNS の利用傾向が大学適応度に与える影響を大学内の友人数が有意に媒介するという結果が得られ、この媒介効果は引越し経験者においてのみ見られた。したがって、新しい環境に適応していく過程において重要となる良好な対人関係を築くためには、同じ環境にいて直接会うことのできる友人との繋がりが大切であり、彼らと SNS 上においても繋がるのが望ましいと言える。今後、縦断研究により「SNS の利用傾向が大学適応度に変化を与えるか」という因果の方向性を検証する必要がある。